

## 札幌大学図書館松田道雄氏旧蔵 ロシア史関係コレクションについて\*

松田 潤

### 1

1998年6月1日、『育児の百科』あるいは『私は赤ちゃん』などの著者として広く知られた、小児科医で評論家でもあった松田道雄が89歳で亡くなった。『安楽に死にたい』という自身の最晩年の著書のタイトルのように家族に見守られた安らかな死であった。

彼の旧蔵約2000冊のロシア史関係の欧文図書が札幌大学図書館に寄贈されたのは、その1年前のことであった。小児科医であった松田がなぜロシア史に深く関心を持ち、ロシア史の専門研究者にも負けない多数の欧文図書を個人で集めるにいたったかということは、彼自身が自分の思想のなりたちの軸になっていると書いている「なぜマルクス主義を信じたのか」[松田、1988b:121-196]、「なぜ革命を信じたのか」[松田、1988b:222-244]、あるいは一種の自伝ともいえる『花洛』、『私の読んだ本』、『京の町かどから』などを読むことであきらかになるであろう。以下はその試みである。

茨城県水海道に代々医者の家系に生まれた松田は、父道作が京大の狂犬病研究室の主任として赴任するのについて一歳で京都へ移り、そこで育った。京都一中、三高とすすみ、父の後を継ぐべく医学をめざした。青年期の松田の心をゆさぶったのは医学ではなくマルクス主義であった。しかし、三高、京大医学部とすすむ中、非合法活動とされていた日本共産党の運動に積極的にかかわることはなかった。献身的に非合法活動に飛び込んだ友人たちを見ながら、同伴インテリゲンチアとして、つねに運動の近くで「卑怯な学生」ではあるが社会的正義と信じたマルクス主義文献を読んでいた。彼にはレーニンがロシアでプロレタリア革命を成功させたことはマルクス主義の正しさが証明さ

れたことのように思われた。

医学部の学生でありながら、私はコミンテルン第六回大会の報告集を、ほかの学生がよんでもわからないように、フランス語版を買って教室でよんでいた。……わずかであるが月々のカンパを集めていった友人が「泥」をはいたら、私もぶちこまれる危険があった。尊敬すべき友人達の忠誠心のおかげで、私は安泰でありえた。それは今からかんがえると奇跡みたいなことだった。……秩序への反撥という気持ちもはたらいていた。その反撥があったので、ロシア語をまなぶことができた。

ロシア語の最初の一年は、日ソ親善協会が合法的に存在したから、特高の臨席はあったが、とにかくおおっぴらだった。だが、そのあとの二年の『露語階梯』や『ロシア語新読本』は、ひっかかる危険の十分にあった内密のサークルでならった。<sup>1)</sup>

そのロシア語のおかげで、小児科教室に交換雑誌としてソ連からおくられてくる「ペディアトリア」(小児科学)の結核関係の論文を抄訳して日本結核病学会の機関紙にのせて一枚五〇銭の報酬をえた。[松田、1980b: 24-25]

医学部を出て医者となってからは職業人として、もっとも虐げられたもの、とりわけ貧しいためにもっとも弱い子どもたちが命を落とすことに心を痛めた。「臆病で」非合法活動に殉じることのできない身には、小児結核の克服を自分に与えられた使命と考え、結核の研究と治療に打ち込んだ。戦争中は京都府の衛生課結核予防係、和歌山県庁の衛生課長になり、結核の専門家として他に代わることのない人物となり、要注意人物ではあったが、当局に捕まることもなく応召して陸軍病院の軍医となった。前線に送られることもなく軍隊でも結核の治療にあたり、無事に敗戦をむかえることができた。

戦後は和歌山県庁に復職するが、役所勤めの不自由さに、すぐに役人をやめ開業医となる。町医者になってからは注射、薬漬けの保険診療を拒否し、自由診療の小児科医として診療活動をおこなう。しかし、保険診療をおこなわない医者の収入では家族を養えないということ

で、数々の執筆活動という副業をおこなうことになる。結核専門医、小児科医として一般向けの医療書のほかに、これまでのマルクス主義の信奉者として敗戦後の自然な流れから民主主義科学者協議会(民科)や、平和問題懇談会への出席に始まって政治、社会への発言などもおこなうようになる。

1953年ころからソ連からの雑誌、新聞や図書が購入できるようになると、戦争中から始めたロシア語の勉強を再開し、ソ連の医学にとどまらず、ソ連のマルクス主義にかんする文献もあわせて読むようになった。

戦後、知識人が雪崩を打つように共産党へ入党した時期、周囲にも「バスに乗り遅れない」ようにと入党を勧める人たちが多かったが、戦前、戦中に権力の弾圧の中に命を落とした友人達のことを思い、やはり入党はしないままにいた。コミンフォルムの日本共産党批判に始まる党の分裂は、日本共産党に対する支持の気持ちをうすくしたという。しかしそれ以上に職業人としてのソ連医学雑誌の記事とアメリカ医学雑誌の記事の比較、ソ連のマルクス主義研究がレーニンとスターリンの引用に終始することなどからソ連の社会、ひいてはロシア型革命に対する疑いが深まっていった。やがて、松田も1956年のフルシチョフによるスターリン批判を知り、はっきりとソ連とそれに従うだけの日本共産党に対する疑問を公の前で明らかにした。

松田は日本小児科学会の代表として1957年にレニングラードでの全ソ小児科学会に招待される。短期ではあったが、ソ連社会とそこに生きる人びとに直接会い、ますますロシア革命の結果としての「社会主義」ソ連を疑問視するようになる。

ソ連旅行からもどると、三一書房の『社会主義リアリズム』(1958)を書くことで、スターリンと彼に導かれたソ連と日本共産党に対する疑いを松田は理論的に整理する。

この本のまえがきには

「社会主義リアリズム」は国際語である。……ソヴェト共産党でも、

日本の共産党でもマルクス主義文学者を活動化させようとする時この言葉は使用されている。……「社会主義リアリズム」の解説書をよむと、これは全く社会主義作家の「戦陣訓」のようなもので、……それだけをつついていると「社会主義リアリズム」論というのはさっぱりおもしろくない。だが、プーシキンからはじまって、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフという文学の遺産を持っている国の文学者が、「社会主義リアリズム」という「呪文」（キルシヨンの言葉）で作品をつくろうということで一本になっている事実は、おもしろくなくはない。

「社会主義リアリズム」はエンゲルスとスターリンから出発した理論としては一つの政策論になるかもしれないが、ベリンスキーから出発した理論として考えていくと文芸思想史になるかと思う。社会主義リアリズムは、ロシアという国に歴史的に発展した文学理論のソヴェト時代の姿であるという立場から、この問題にはいっていかうというのがこの書物の意図である。

ソヴェトで出される解説書ばかり読んでいては、どうしても合点がいかないというところから、だんだんさかのぼってロシアの社会主義の最初のページにまで及んでいった結果である。[松田、1958：1-2]

とある。ロシア革命の源流にさかのぼって、青年時代に自分たちを突き動かして、殉教者をまで生んだ何ものかを明らかにしなければいけないということであろう。

京都大学人文科学研究所の桑原武夫の主催する『ブルジョア革命の比較研究』（1964）という共同研究のメンバーとして松田は「日本およびロシアの初期社会主義—ゲルツェンと北一輝」を発表している。

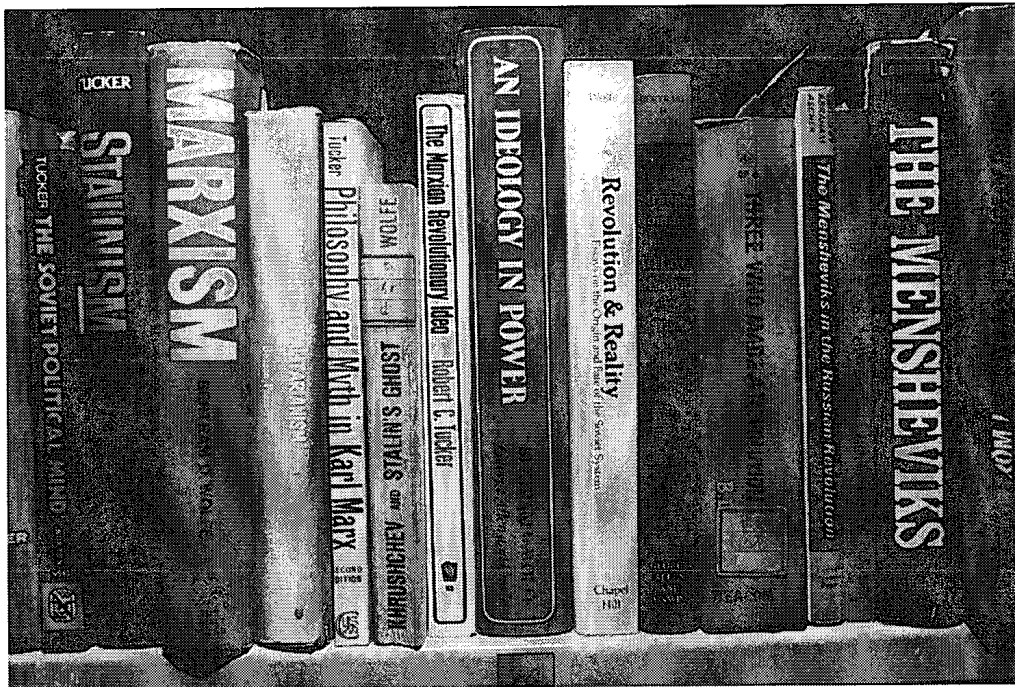
こうした松田のソ連と日本共産党についての勉強は1970年に『ロシアの革命』とその副産物の『革命と知識人』として世に問われることとなった。この間、松田が収書したものの一部分が札幌大学図書館に寄贈された。

## 2

松田のロシア史関係コレクションが札幌大学図書館に寄贈されるに

あたっては、長くシベリア抑留の体験を持つ、評論家内村剛介<sup>2)</sup>の仲介があった。

その間のいきさつを少し詳細に述べてみる。松田道雄の蔵書について筆者が内村剛介から相談を受けたのは、1996年の「ロシア史研究会」の大会の懇親会の席であった。内村から渡された数枚のカラー写真には書棚に並んだ図書が背文字を読み取れるように写っていた。(写真参照) それが松田道雄の蔵書との最初の出合いであった。



内村は当時筆者が勤めていた、日本で国立唯一のスラブ地域研究の研究機関である北海道大学スラブ研究センターに、この蔵書が受け入れられる可能性を打診してほしいといった。<sup>3)</sup> すぐに筆者は、以前ロシア史部門の外川継男教授から、松田道雄の蔵書をスラブ研究センターでちょうどいする話があるということを知ったことを思い出した。しかし、その話があってからずいぶん時間がたっており、そういった昔からの経緯を知る外川は、上智大学に転出して久しく、当時のスラブ研究センターではこの話はほとんど一からはじめなければならなかった。

蔵書の全体については後から残りの写真を送るので、可能性があるかどうか打診をしてほしいという内村の依頼であった。ロシア史関係図書が欧米書中心におおよそ2000冊弱ある。蔵書については「松田道雄コレクション」というようにまとめる必要はない、対価も要求するものでもないというのが松田側の意向であるというように話された。

スラブ研究センターの図書館委員であった原暉之教授にまず話を伝えた。そのころ、スラブ研究センターが北大附属図書館の本館に使用を許されている書庫スペースには既に余裕がなく、未整理図書を数年分抱えた状態では、センターの図書館問題の責任者であった原教授としては、積極的に受け入れにゴーのサインを出せる立場にはなかったようであった。また、写真を見て、松田の図書がスラブ研究センターの蔵書とほとんど重複するだろうという判断もそれに加わっていた。

結局、スラブ研究センターでは受け入れることができないということになった。筆者個人は、これまでの松田道雄のロシア史研究にともなって収集された蔵書をスラブ研究センターに受け入れることが困難なら、距離的に近く、しかもロシア語学科のある札幌大学図書館に収蔵されるなら、蔵書もより有機的な利用が可能になるだろうと考えた。そこで以前より懇意にしていた札幌大学図書館でロシア語図書の整理の責任者でもある森俊司に相談を持ち掛けた。森の尽力もあって、札幌大学の図書委員会は松田の蔵書を引き受けることを決定した。<sup>41</sup>

こうして蔵書は1997年に札幌大学図書館に受け入れられ、図書館に未所蔵の英・独・仏書と和書1619冊がとりあえず整理されて88ページからなる仮目録が1999年10月には完成された。当初図書館ではコレクションとしてまとめて別置するつもりはなく、一般の蔵書と混配を予定していた。このためロシア語を除く未所蔵図書のみの仮目録となった。残念なことに松田自身はこの仮目録を目にすることはできなかった。このような個人コレクションがわずか1年ちょっとで整理が済んだということは、最近よくうわさに聞く、図書館での個人コレクションの寄贈を拒否するという扱いからすると、珍しいことといえよう。洋書は英・独・仏の図書に限れば、学術情報センター（現・国立情報

学研究所)の目録の電子化によって、書誌情報を共有化する共同目録作業で、整理作業が容易になってきているとはいえ、限られた定員の中での日常業務に加えてのことである。

「個人蔵書」というものがどういうものか、どのような意味を持つかは、なかなか一概にはいえない。ただ思想家あるいは研究者がひとつの結論に至るまでの過程でどんな本、どんな資料を読んできたかは非常に重要なことである。このことは思想史や、研究史を語る上での基本であろう。こうした「個人蔵書」についての日本における研究には細谷新治が経済思想史を日本の大学図書館の特殊文庫から分析した研究や、水田洋によるアダム・スミスの蔵書目録作成などの国際的な研究がある。

### 3

松田道雄のロシア関係の著作が日本のロシア史研究史の中ではいわゆるアカデミズムに属さず、日本の社会運動の歴史を背景にしてロシア革命を記述したということで、荒畑寒村のナロードニキ研究とならんで特異な反響があった。

『言論は日本を動かす』というシリーズの第5巻目『社会を教育する』に、小児科医として日本の社会になすべきことは何かを、ロシアの革命的知識人の精神をもって実践した人物として松田道雄が取り上げられている。著者樺山紘一は1970年に松田の書いた『ロシアの革命』を熱心に読んだということから筆を起す。

「……『ロシアの革命』がもっているある種のやりきれない暗さが、読者の心の琴線にふれたのであろう。偉大な社会主義革命の経緯をえがいた同書は、しかし革命によってうしなわれたものの記述をもって、ひとをひきつけた。レーニンの革命が、スターリンによって汚辱をうけるさまをもって、同書はとじていたのだ。

……なみの歴史書であれば、ロシア革命を一九一七年の政治動乱としてたどり、一ロシア社会主義の勝利を検証しておわるであろう。……一九七〇年当時、ふつうの読者が手にする歴史書は、そのいず

れかであった。菊地昌典『ロシア革命』（中公新書 一九六七年）、江口朴郎『第一次大戦後の世界』（中央公論社版『世界の歴史』第十四巻 一九六二年）の例をあげておこう。だが、松田道雄はロシア革命を、はるかに長いタイム・スパンでえがいた。十九世紀初頭にもさかのぼり、自由と革命に熱い生命をささげた人びとのあとをたどった。「ロシア革命」という政治上の事件は、こうした百年間の帰結だというのは。……「松田さんの歴史書は後半がせつない」（乾孝）とは、すぐれた観察である。『ロシアの革命』は、しかしじつはその悲しい終幕のゆえに、一九七〇年の読者に愛されたのである。というのも、その読者の多くは、まさしく失意のなかに生きていたはずだから。二年前の晩秋から全国の大学を吹きあれていた学園紛争は、急速に鎮静していった。……『ロシアの革命』は、その幻滅の七〇年に世にでたのである。革命すらもが腐朽をまぬかれない。……羽仁五郎の『都市の論理』が、バイオレントな魅力をふりまいてからわずか一年余、こんどは、傷ついた身を松田道雄によっていやされようとは。このような七〇年の情景は、わたしの、というよりはむしろ、わたしたち世代の共通の心象風景だったとおもう。」〔樺山、1986：275-278〕

松田の革命史を、読む側も自らの運動に引きつけて読んでいたのである。

#### 4

一般に日本では外国研究のための外国語文献を公共図書館で入手することは非常に難しい。日本の公共図書館の蔵書中外国語文献の占める割合はかなりすくないといえる。納本図書館であり、国会議員のための調査図書館でもある国立国会図書館を除けば、多少まとまって外国語の図書を収集していたのは全国でも数館にすぎないといえよう。最近でこそ、外国人サービスの中で外国語図書を集書することが図書館人のあいだでは話題となっている。これとても研究者の要求するようなものを収集するわけではなく、在日外国人のための一般的なものである。もちろん、公共図書館が市民のための図書館である以上、専門家のための図書を、ただでさえ乏しい資料費のなかから収集しなけ



ればならないということではない。

全国的な洋書の共同利用を目的として編纂されていた『新収洋書総合目録』も国立国会図書館、主要大学と国立の研究所が中心で、公共図書館ではわずかに都立中央図書館、大阪府立中之島図書館、大阪府立夕陽丘図書館が参加しているだけである。日本では大学に所属しない限りは外国研究は非常に困難であろう。

1933年に治安維持法によって逮捕され東京商科大学から追われ、やむなく公共図書館を利用して研究を続けなければならなかった大塚金之助は、「図書館から」という文章で戦前の中央図書館の思い出を書いている。「私は帝国図書館の前で何十番目かの入場を何時間と待ちあぐむ間に、やっとベンチが空いたのでそれに腰かけては膝の上で感想を書きつけることがあった。一国の中央図書館が首都の中央になくて交通不便な一隅にあったり、中央図書館がその本来の使命から外れて、専門研究家よりも試験勉強家に利用されてゐたりするのは、日本の特殊風景である。……この図書館の内容は、日本歴史や仏教の研究には向くであらう。先日もこの図書館に二十年通って仏教に関する労作を完成した篤志家のことが新聞に出てゐた。その人の研究態度や方法や成果については何も知らないが、私はさういふ人の努力の仕方には敬意を表する。しかし世界文献 (Weltliteratur) を知らうとし、近代科学の精髓に触れてゐたい者にとっては、この図書館は決して充分ではない。例へば一六世紀のトーマス・モアの『ユートピア』のラテン原文はなく、僅かに一八〇八年の英語版 (ディブディン) が一冊あるきりで、その後の優れた諸版は一冊もなく、モアの伝記書も一冊もない。外国雑誌も少ない。……中央図書館があまり役に立たない日本では、公開されてゐる唯一慶応義塾図書館が砂漠のなかのオアシスである。もっともここも試験期には外来者入館お断りだし、……日本の図書館は学問などするやうにできてゐないと断念する人があるかもしれないが、この国で学問でもしようと言ふからには、かうした困難を長い期間に互って克服する意気込みがなくてはならず、現にかうした図書館難を乗切って研究に精進してゐる民間研究家もすでにあるので、

私にとってはよい刺激である。」(1935.4.10) [大塚、1981a:3-7] また、「大学図書館」(1936.6.26) という文章では、「日本の図書館事情は諸文明国とは違ってゐる。少なくとも経済学の方面では、日本の中央図書館(上野の帝国図書館)は諸文明国のそれにくらべて著しく劣ってゐるのに、大学図書館のなかには諸文明国のそれにくらべて決して劣らないものがある。諸外国では、中央図書館は研究家のためにあり、大学図書館は多くは学生のためにある(ベルリン大学)。日本では中央図書館と大学図書館とがその地位を転倒した形である。それだけに日本では、大学図書館の社会的責任も重大であり、同時にその反面に、少数の現職者が知らず知らずの間に結果として研究手段を独占する危険も生じやすいのである。……日本の唯一の公開大学図書館は三田の慶応義塾にある。入館料一日五銭で入館には何の制限もない。……日本ほど図書館難のひどい国は文明国のどこにもない。第一、公設図書館だけにたよってゐては、もはや今日の世界の学界の進展が充分にはわからない。今日の図書館経営が、予算、図書購入法、専門化、語学制限、思惟制限に制約されてゐるからである。一八世紀イギリス農業史の研究者ラウロヴィスキーの論文は、イギリス雑誌『経済評論』に出てゐるのは図書館でも見られるが、仏文『ソ連邦科学アカデミー年報』に掲載されたものは図書館では見られず、まして一九三五年のそのロシア語の著書などはない。」[大塚、1981b:10-12]

当時の上野の帝国図書館の洋書についての研究を見ると、1898年から1921年の田中稲城の帝国図書館長時代は19世紀末から20世紀初頭の人文・社会科学関係の洋書は限られた予算の中でよく集められていると評価されている。さらにこの当時の欧米の社会労働運動関係書を多く収蔵しているとある。[中林、1995:150-152] しかし、これらの収蔵図書が一般利用者にとって閲覧が可能であったかという点についてはまた別である。<sup>5)</sup>

首都東京の中央図書館でさえ戦前はこの状態である。では、戦後になって公共図書館の状態はどの程度改善されたであろうか。

大学に所属しない著述家として公共図書館について、図書館利用者

の立場からの発言をこのところ積極的におこなっている津野海太郎（最近和光大学の教授になった）は、「私は京都が好きだし、友達もたくさんいる。でも私は、あの街には住めそうにない。何しろ地域の公共図書館の数があまりにも少なすぎるのだ。大学人でもないかぎり、京都に住むということは、そのまま、日常の図書館利用をあきらめることを意味してしまう。

私はプロの文筆家ではないけれども、この本が現にそうであるように、しばしば発表を前提にした文章を書く。

でも私が書くものは、そのほとんどが自分でやったこと、経験したことをもとにしているのです、学者や評論家諸氏のように、膨大な資料をいつも手元にそろえておかなければならない必要はない。たいていのことはわずかな蔵書と近所の図書館ですんでしまう。あとは新刊書店と数軒の古本屋をざっと一回りするだけ。必要な本が手に入らないなどいつものことだが、そんなときはあれこれ悩まず、いさぎよくあきらめることにしている。」[津野、1998a : 154] と述べている。

京都の公共図書館が津野の書くほどのことなのかどうか、あまりよい公共図書館利用者とはいえない筆者には即断できない。ここ数年来、新京都府立図書館の建設について行政側と図書館振興を求める市民とのあいだでやりとりが続いているのは事実である。京都を愛し『花洛—京都追憶』、『京の町かどから』など数冊の京都を綴った著作を書き、ほとんど終生京都から離れることのなかった松田は、在野の研究者としてこのことをどのように考えていたのであろうか。

松田の図書館についての考えがまとまってみられるものは、それほど多くはない。「ひと、本に会う」（1979.4.24）という朝日新聞に書かれたエッセイには高等学校の図書館での読書、医者になってからの小児科の図書室での医学書、医学雑誌をノートにとっての読書、戦後の占領軍のクルーガー図書館でのアメリカの最新医学の読書がでてくる。[松田、1980q : 33-36] また、「図書館と私」（1976.9）というそのものずばりのタイトルのエッセイでは、高等学校の図書館の蔵書がよかったことを「となりの京大の教授にならずに、あえて高等学校に

とどまっていた先生がたが、学者としての誇りをかけてあつめられたからだった」といい。「となりの大学にはいったころには、もう左翼学生だったから、大学の学生図書館にはいかなかった。ここはすこしでも傾向のある本は丹念にしまいこんで、学生にはよませなかった」と大学図書館については手厳しい。「それにレーニンだのスターリンだの本は、毎日本屋がよいをして、出た日に買わないと、翌日には警官が没収していくのだから、大学の学生図書館では買いもできなかったろう。」[松田、1980h : 180-182]

松田は「自分のかせいだ金で、自分の好きな本を買」うことのほうを好んだようだ。図書館や他人の本を借りて使うことをさして、

カードやノートをつくることは、本のあり場所とカードのおき場所と両方を管理せねばならぬわずらわしさがあった。

人の本を借りたり、図書館の本をつかうからそういうことになる。自分の本しかよまぬことになると、別の読書法ができてきた。おもに洋書をよむので、欄外に日本語でたてに要約をかきこむ。本のさわりと思えるところは、表紙の裏に自分の文章としてかきつけ、何ページにあるかをかいておく。

本をよむたのしさと、本をおぼえる労力とを分離したわけだ。欄外に注をすることは、よみとばすスピード感を減殺するものの、一週間かかってよんだ本を、あとになって二、三時間でよみなおせる便利がある。ただ、そういう便利があるということが、よんだ本をおぼえる努力をますます小さいものにした。

教師でもない、研究者でもないリタイアード・ドクターという身分のおかげで、この十年気まぐれな読書をたのしむことができた。[松田、1980g : 35]

しかし、小児科医松田がロシア革命を考察するときに図書館をたよらずに、みずから本を購入していたこと理由は以下のように述べている個所がもっとも妥当ではなかろうか。

江戸時代の裕福な町人が商売でもうけた金で、好きでやっている学問とちがって、いまは学問が大学にやとわれないとできない仕組みになっている。そこにいないと学者として通用しないという意味でなく、個人では学問をする材料が買いそろえられないということである。学問をさせてくれる大学が、しろうとのおさめている税金や授業料でなりたっているのだから、大学で学問をしているものは、しろうとの金で勉強していることになる。ひとさまの世話になっていて、学問のための学問をしているのだではすまぬと思う。「しろうとと学問」[松田、1980h、185-186]

であるからこそ、松田は個人として自由に学問をするために材料を買いそろえつづけた。

隣室と階下の書架にぎっしりつまった本が心のこりだが、これは図書館通いのできぬ人間が個人用にそなえた小図書館と思うことにした。図書館としてよく役にたってくれた。[松田、1983b:213]

松田がロシア語図書を主に購入していたナウカとの関係を京都営業所の担当であった小林晃は「追憶松田道雄先生」という文章の中で「先生は六十歳の頃現在のご自宅（夷川小川東入ル）に移られ、その頃はナウカも自動車が入り、お届けの本の量も一段と多くなりました。外国の単行本、ロシアで出版された歴史、哲学、思想、文学、数学、社会学、生物学など、それから、欧米で出版された医書、小児科を始め多岐の分野にわたっています。先生はよく、『大学では必要な部分しか購入せんし、必要な時自分で見たいところがないのや、そやさかい自分で買うてるのや。本来大学や研究室で買うてくれればええのやけどなあ』とおっしゃっていました」[小林、1998:40-41]と書いている。

## 5

松田がこうして収集した蔵書を一覧し、さらに、図書館にたよるこ

となく集めた図書に対する彼の考え方を見てみる。

松田の蔵書には先の文章のように赤いボールペンで表紙の裏に書きこみをしたものがしばしば見られる。

松田はこのことについて「私の読書法」(1956.5)では、次のように述べている。

また本とその内容を書き抜きするノートを用意せよと、大学者たちは随筆のなかでよく言われるが、市民はそんなことをしないがいい。本とノートとを同時に保存することは實際上むづかしいからである。本に赤すじをひき、欄外に書きこみをしておけば、本がある限りノートも同時に存在することになる。本は置物でなく消耗品である。不要になれば、どしどし捨ててしまうべきものである。今もっている本のすべてを捨てても痛痒を感じないというのが、本読みの理想である。  
[松田、1980g : 21]

さらに外国語の図書については、以下のように書く。

今は読めそうもない本でも、古典だの、信用すべき人間の書いた本は買ってあげばいつか読むものである。そういう本を本箱にならべておくことが無言の威圧になって、それを読むべく色々の準備をさせる。ことに外国語を勉強しているときは、この手はしばしば成功する。  
[松田、1980g : 23]

十九世紀のロシアの革命思想家だったゲルツェンのことなど、どうでもいいようなものの、なぜゲルツェンがロシアのわかい革命家の願いをいれないで、革命組織からしり込みしたかなどということがかいてある新刊がくるとよみたくなる。昭和初期にシンパから一歩ふみだせなかった自分の当時の気持ちににたようなところがあるかもしれないと思うからである。

それをよんでいると、いろんな本からの引用がある。そのなかでかつてよんだものがあると、書庫へ行ってとってくる。引用してある箇所には赤いアンダーラインがしてあったりするとうれしい。参考文献としてあげてある本の半分以上をもっているようなときは、たといそれ

がよんでいない本でも、うれしい。あの本はいい本だったんだと、それをえらんだかんに自慢したくなる。「いまの読書」(1980) [松田、1980g : 280]

札幌大学図書館に入った本にも赤いボールペンの書きこみが随所に見うけられる。たとえば、

Anton Antonov-Ovseyenko の *The time of Stalin : portrait of a tyranny* というスターリン時代の回想録のあそび紙には「スターリンは精神病の故に悪をしたのではない。彼は健全であった。健全であって悪をしつづけたのは生まれつき悪人であったからだ。彼はかつて人間に対して善をしたことはない。悪人であった。彼の唯一の願いは権力の座につくことであった。筆者はソ連の市民法にもとず(ママ)いて発言する。論理的には彼のオールドボリシェヴィキの復権はトロツキーにまで及ぶべきなのに、そこまではいたっていない。キーロフ事件についての記述を見て『ロシアの革命』の該当部分があやまっていないことをたしかめられた気持。」とある。

この書き込みに込められた松田の気持ちについて、次女の青木佐保は「この本(『ロシアの革命』)を仕上げるまでに読んだ本については膨大な量だったという印象があります。また出版してからもロシア革命に関する本を読んでは『ワシの考えは正しかったんや』と追確認することが常でした。これらの勉強のために本屋さんにカタログで注文し、家に持ってきてもらっていました」とのべている [青木、1998 : 41]。

『ロシアの革命』は一般からの好意的な評価にもかかわらず、ロシア革命史研究の第一人者の一人、和田春樹による書評 [和田、1970:314-317] がかなり辛辣なものであったことが気になっていたのであろうか。あるいは、毎日新聞の連載コラム「ハーフ・タイム」に書いているように『ロシアの革命』に対する日本共産党とその支持者からの有言、無言の反応が気になっていたのであろうか。 [松田、1980d : 132-133]

松田を「戦後」を代表する人物の一人としてとりあげた桜井哲夫は、松田が「60年代末から70年代初めの学生運動に、辛辣に対応している。それは、管理する大人への積もり積もった子どもっぽい恨みの爆発だとみるからだ……。だが、多少推論すれば、おそらく、松田がこのように断じたのは、日本の左翼が、相変わらず、レーニン主義から脱却していないことへのいらだちのあらわれとも読める。じっさい、独学で、ロシア革命史を執筆した松田の『ロシアの革命』（河出書房新社、1970年）に対する歴史学者達の冷淡な反応は<sup>6)</sup>、松田を失望させるものであった。」と書く。[桜井、1994：246-247]

## 6

『ロシアの革命』についての松田の思いは蔵書の書き込みに点在するが、蔵書そのものについての意見は彼の著作のここかしこに見受けられる。

もうひとつ、気ままな読書をたのしむためには、自分で本を買うことだ。ひとから借りた本は、どうも気づまりだ。電車のなかにもっていきこうが、横になって読もうが、気に入ったところに線をひこうがかまわないというのでないと本はたのしくない。

十年も二十年もたって、以前に読んだ本のどんなところに感心していたかを知るのも、その時代というものが感じられておもしろい。「人生と読書」（1970.12）[松田、1980g：31-32]

また、

こまったのは、自分の読書力を誤診して買いこみすぎた外国書の処置である。ある日突然、その全部を古本屋に売ったとき、私は、ほんとうに自由な人間になれると思うのだが。「読書と私」（1974.5.27）[松田、1980g：47]

自分だけたのしむジャズをかける気にもなれず、手もとにある「王陽明集」をぱらぱらとくってみる。……いちばん耳にいたいのは知



と行とは分けられない知行合一説だ。

ある人間が何を知っているかをみるには、その行をみればいい。もし、おなじ行をするのに一人の人間は一冊の本もよまず、他の人間は十冊の本をよんだとしたら、どちらが人間としてすぐれているのか。陽明先生はそういつているようだ。

そうなると、階下と隣の書庫につまっている万をもって数える「蔵書」は、いまこうやって「おいさんばあさん」の一刻を生きるのに、どれだけ役にたっていることか。「おいさん ばあさん」(1976.1.27) [松田、1980d : 110]

これらの文章からは蔵書について執着が強いようにも、あまり強くもないようにも、どちらとも受け取れる。ただ蔵書についての執着というよりも、蔵書に増えられて処分に困るユーモラスな文章は「リタイアードクターの日々」というタイトルでまとめられたエッセイ群にある。まさに札幌大学に松田の蔵書が運び込まれたのは、止めどなく増殖していく本に困っているということが本当のところであったのかもしれない。

私は書庫の二階に住んでいる。四年ばかりまえに、本の入れ場がなくなったので、思いきって二階建ての書庫をつくった。さて建ててみると、二階は南向きの六坪ばかりのあかるい部屋になった。書庫にするのが惜しくなって、そこで本をよんだり、ものをかいたりすることにした。

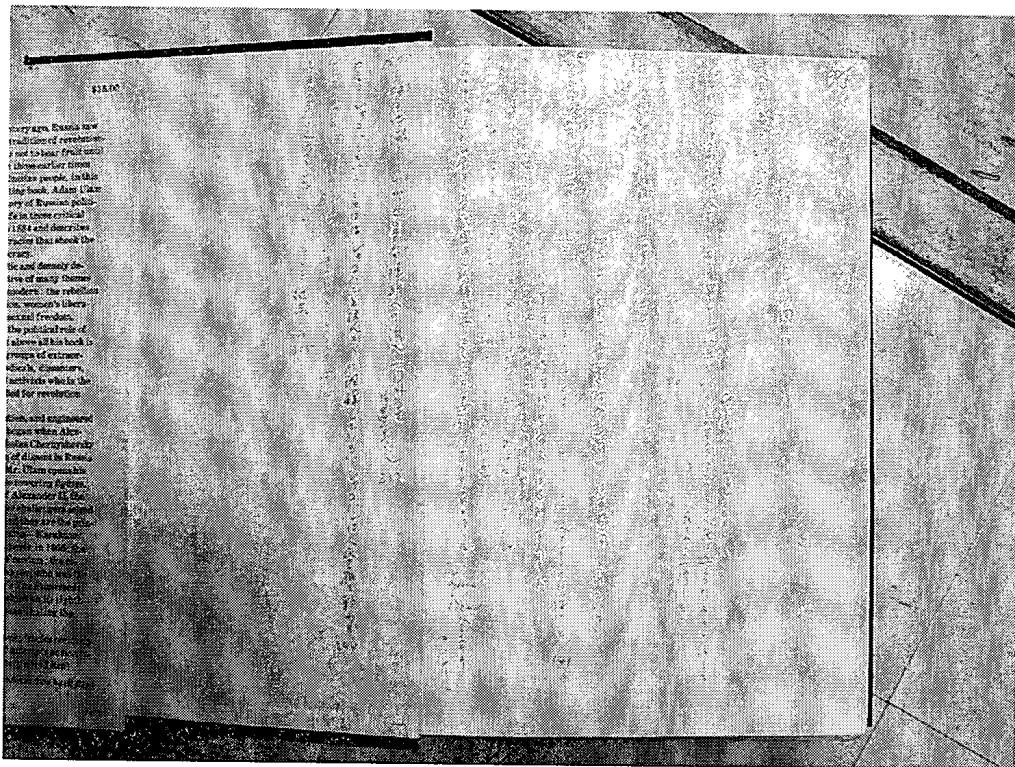
なにしろ下の書庫は、本がぎゅうぎゅうつめこんであるから上の部屋まで本をおくと、本に押しつぶされそうな感じになるので、何もおかないことにした。「独房と神道」(1970.3) [松田、1980h : 133]

松田が読んでいたロシア革命に関する図書についても、あちこちに書かれた読書エッセイを見てみるとよい。たとえば「ナロードニキ」というタイトルの中にはこういう記述がある。

家族が二泊三日の保養にでかけたあと、意気こんでよみだした洋書

をやっとよみおえた。ウラムというポーランドから米国へ移住したロシア学者の『人民の名において』という本だ。ナロードニキとよばれる前世紀の後半の革命家たちの動きを四〇〇ページそこそこにまとめている。数年前、おなじ時代をとりあつかった本をかいたことがあるので、よむきになったのだった。〔松田、1980d : 274〕

ウラムの本とは *In the name of the people: prophets and conspirators in prerevolutionary Russia* / Adam B. Ulam - New York : Viking Press, 1977のことである。このウラムの本の表紙裏を見てみるとちゃんと赤いボールペンの書きこみが見つかる。(写真)



それだけでなく札幌大学図書館のウラムの蔵書は16冊あって、うち9冊は松田道雄コレクションにある。ちなみに日本国内の大学図書館のウラムの図書は文部省の国立情報学研究所の全国蔵書目録検索システム (NACSIS Webcat) によると全部で35冊見つかる。そのうちの9冊を小児科医松田が個人で収集しているというのは彼のロシア革命

史につき込んだ情熱の多寡をしることとなろう。

松田のロシア史研究の集大成であった『ロシアの革命』は人物に力点を置いて書かれたといえる。[朝日新聞:1970.4.7]、[林、1970] したがって、蔵書には伝記的なものが多数集められているだろうということは想像に難くない。

最初の仮目録として整理された蔵書を分類にもとづいて構成を見つめる。分類というものが一冊の本を一つの分野に限定してしまっていて、複合的な主題を持つものの他の面を切り捨てるということで、非常に問題があることは承知の上での作業である。言語別の数は英語図書1485冊、仏語図書135冊、独語図書147冊、露語図書138冊、日本語図書29冊となっている。総受け入れ冊数と目録タイトルの数との差は多巻図書を一括記入することや重複タイトルのためである。

哲学・思想と分類されるものは44冊程度。歴史に分類されるものが485冊、もちろんほとんどはロシア史である。伝記に分類されるものが108冊、このうちレーニンに関するもの25冊、スターリンに関するもの12冊となっているのに、伝記に分類されたタイトルからはトロツキーのものはみうけられない。松田自身が翻訳をしたトロツキーの『レーニン』[トロツキー、1972]の英訳本もなく、あるのは『若きレーニン』(*The young Lenin / by Leon Trotsky : translated from the Russian [MS. ] by Max Eastman : edited and annotated by Maurice Friedberg-Newton Abbo : David and Charles , 1972*) だけである。

もちろんトロツキーに関する図書が全くないわけではない。タイトル中にトロツキーの名前のあるものは13冊存在する。

しかし、松田の訳書『レーニン』のあとがきには、

『レーニンについて』は1925年にニューヨークから出たミントン・バルチ社版から松田が訳して筑摩書房『世界ノンフィクション全集』30(昭和37年)にのせたものに、こんどプレス・ユニヴェルシテール・ド・フランス社からでたテキストによって『レーニンについてのほんとうどうぞ』『小さい人たちと大きい人』をあらたに訳してつけくわえた。ゲラの段階で1971年刊行のタマラ・ドイッチャー訳のイギリスの

ハラップ社の版を手に入れた。全体として正確なように思えたが、ロシア語原典を入手できなかったので、人名、地名の不正確をただした以外旧訳をかえなかった。参考にさせてもらったことを感謝している。

『若い日のレーニン』はおなじ社からでたモーリス・パリジャーヌ訳の *La Jeunesse de Lenine* 1970から竹内が訳した。

とあるが、これらのタイトルは札幌大学が受け入れた蔵書には含まれていない。

もうすこし数量から分析をすすめると、社会思想・政治思想の分野、多くは社会主義、共産主義、マルクス主義に分類されるものが423冊となっている。ソ連を中心に社会主義圏の政治・事情、国際問題に分類されるものが372冊とつづく。

仮目録に含まれなかったもののうち札幌大学図書館に既に受け入れていたものが150冊と、ロシア語図書が138冊ある。ロシア語の図書の中で目立つものはソ連共産党の会議録と、プレハーノフの20年代に出版された著作集、多少のパリでの復刻本くらいである。

札幌大学に寄贈された蔵書にロシア語のものの少なかったことの原因の一端は、今は松田自身が書いたつぎの文章から想像するほかない。

うなぎの寝床の末端である「離れ」がかたむいてきた。離れにカッコをつけたのは、京都の民家の離れときくと数奇屋風の建築などを連想されるところまるからである。

以前に住んでいた鉄加工職の人が、古材をあつめ、鉄棒で補強してつくった床のひくい平屋で、半分が物置になっている。街路から遠くて静かなので寝室にし、物置のほうは改造して書庫にしていた。はじめはひろいつもりでいたが、だんだん本がふえて、はいりきれなくなり、別の場所に三倍ほどの書庫をつくった。しかし、そこでも本は加速度をもってふえ、書棚にはいりきれず、通路にもつまあげている。  
……

「離れ」の一部を書庫にしたのは、五〇年代のはじめで、そのころからソ連の本が自由にはいりだしたのだった。昭和七年にロシア語をなら

いだししてから、ソ連の本は翻訳でよむだけで、医学雑誌以外はほとんど手にいれられなかった。ソ連の本は未知の大陸のようなものだった。自分の目でみたら、社会主義の成果がどんなものかわかるだろうという期待をもっていたから、輸入が解禁になると、どんどん買った。どんどんというほど買えたのは、一冊五〇〇円以上の本はめったになかったからである。

革命のドキュメント、文学のクラシック、経済学、政治学、哲学など医学以外のものも買った。ソ連と特約してロシア語の本専門の東京の本屋さんから、いいカモだと思われていたらしい。京都の支店に私あてに名札をつけて送ってきた。

「これは買ってもらえないと本社にまた返送しなければなりませんので」

と販売にきた人からいわれると、その本屋があまり景気がよくないらしいと知っているだけに、ことわりきれなかった。そんなことで、「離れ」の書庫の大半はソ連の本であった。

本の移転の終わりちかくなって、これはどうしてもはいりきれないことがわかってきた。それで、一部を処分することにした。

まず、映画、演劇にかんするもの。これはソ連の映画におもしろいものがないこと、演劇はみられないことが理由である。

つぎが、無神論と弁証法的唯物論に関するもの。これも発展性がみられないからである。

そのつぎが、文学批評。これはゴーリキーがいちばんえらいという話をききあきたからである。

さらに、経済学では、世界情勢の分析や資本主義の没落にかんするもの、ブルジョア経済学批判、資本論の注釈のたぐい。これは現実感にとぼしくて、もうよむ気がしないからだ。

それから医学関係のもの一切。でたときからあまり新鮮感がなかったものは、十五年もたてば、もはや永久にみないだろうから。こうして三、四百冊をもってかえってもらってやっと書庫をからにすることができた。……

六〇年にはいってから私は、かなり西欧の本で歴史や思想にかんするものを買った。そのごく一部をよんだにすぎないけれども、ソ連で六〇年代にだされたものと比較すると、程度がたかいといわざるをえない。学問というものは自由な空気のないところでは絶対にそだたな

いものなのだ。

また復刻がさかんになって、スターリンがいばりだすまえのロシアの雑誌や本も手にはいるようになった。それと、いまのものをくらべると、以前のもののほうが断然おもしろい。「書庫の移転」(1972.10) [松田、1980h : 163-166]

これらのロシア語の図書のほとんどがどこに移転していったのか。これらが札幌大学図書館に寄贈された図書の前に、北大スラブ研究センターに最初に打診のあったものなのであろうか。

日本語の社会科学、特に社会主義関係の図書が立命館大学に寄贈されたというようにも聞いているので、他にも京都の近くでどこかの大学などへ収まったのであろうか。想像はふかまるだけである。

このことについては関西のロシア研究会の方々、あるいは図書館関係者の話を聞く以外ないであろう。

また、自分自身を「ナロードニキのなれのはて」[松田、1980a:68]と呼んでいたにもかかわらず、ナロードニキについてのまとまった本はあまり見うけられない。ナロードニキについて松田がまとまって書いたものとして平凡社の『思想の歴史』シリーズ第9巻の『マルクス主義と社会主義者』の中に収められた「人民の中へ」[松田、1980c:5-60]があるにもかかわらずである。松田自身もこれを書くさいに「ヴェンツェリだとかツーンの解説書におおくよらなければならなかった」[松田、1971:213]といているが、今回の受け入れ図書には F. Venturi のものは *Studies in free Russia* (1982) のみで、ここで指しているだろう *Il populismo russo* の英訳である *Roots of Russian revolution* も、日本における最も早い時期のナロードニキ運動の紹介である煙山専太郎の『近世無政府主義』のもととなった A.Thun の *Geschichte der revolutionären Bewegungen in Russland* は見つからない。図書館や他人の本を使うことを嫌っていた松田がこれらの本を所有していなかったということは考えにくい。こういうことから、必ずしも今回の札幌大学受け入れ分がすべてではないだろう。もちろん、最後まで手

もとに残しておきたかった本も多数あっただろう。

## 7

松田のロシア史への関心の中心は、革命に対する若い日の自分自身の思いと、日本の共産党とそれを指導したソ連共産党の関係であったのだろう。

1996年に執筆された「テレビ」という文章には、

人は自分の世代に忠実であるしかない。二十世紀の初めに生まれた本好きの人間はインテリゲンチアになるしかなかった。インテリゲンチアとしてまともであろうとして、少年期にマルクス主義の洗礼を受けた。知的に成熟した頃、社会主義国がおかしくなりかけた。自分の世代に忠実でありたいと思えば、少年期に自分たちをとらえた「昭和マルクス主義」とは何かを問わねばならなくなった。そのために、小児科医なのにロシア語をやってロシアの革命をしらべた。私のかいた『ロシアの革命』は今の若い人にはわからないだろう。だが、それはそれでいいのだ。彼らは彼らで、自分の世代に忠実であってほしい。[松田、1998：42]

とある。

スターリンによって振り曲げられたということだけでなく、革命を指導したレーニンにさかのぼって問題を考えようとしていたことは書かれたものだけでなく、蔵書にも現れているといえよう。しかし、スターリン、レーニンと比べてトロツキー自身に関連した図書があまり見うけられないこと、自分の翻訳した図書の原本が見当たらないこと合わせると、これもまたまとまってどこかに譲られたということも考えられる。

「ある月読んだ本」(1972)というエッセイにはこういう記述がある。

ウォーレン・ラーナーの『カール・ラデック―最期のインターナショナルナリスト』(1970・スタンフォード大学出版部)は、たいへんおもしろ

ろかった。ラデックという人物にはあまり共感をもてないが、ラデックを通して描かれているローザ・ルクセンブルクの姿は見事であった。……この本におおく引きあいにはだされるネトルの『ローザ・ルクセンブルク』を本棚からひっぱりだしてきて、これをよもうかと思ったが、いやいや、そういうことをするとローザ屋になってしまうと思いとどまる。

そしてまったく関係のないデイヴィッド・ハケット・フィッシャーの『歴史家の虚偽』(1971・ロンドン・ルートレッジ・キーガン)をよみはじめた。……

『歴史家の虚偽』をよんだので虚偽の歴史の最大であるスターリンの粛清をよみたくなったので、以前ざっと目を通したコンケストの『グレート・テラー』(1968・ニューヨーク・マクミラン)を丹念によんだ。……

つぎによんだのは、ジョン・ダンの『近代の諸革命』(1972・ケンブリッジ大学出版部)だ。この本は非常にいい……

つづけてワグナーという人の『革命の終焉』(1970)という本をよみかけたが、てんで魅力がなくて放棄した。[松田、1980g: 41-43]

とあって、これらの本が、あたりまえのことに札幌大学図書館の松田のコレクションの中に見つけられることがうれしい。

蔵書の出版年を見ると1990年出版のものが一番新しいものであった。ソ連崩壊のころまでは積極的に本を買われていたということであろうか。松田が85歳頃ということになるので、著述のなかでロシア史や日本共産党についての発言を止めた時期とも重なるかもしれない。ソ連の崩壊とともにもうこれ以上、その手の発言をすることに積極的な意義を感じられなくなったのだろうか。

実際松田の1986年以降の著作の主なものをあげると以下のようになり、ロシアに関するものが再録されているのは『わが生活わが思想』をのぞき、なくなる。『松田道雄の安心育児』(1986)、『松田道雄 子どもの健康相談—いざという時の「安心育児」』(1987)、『町医者 of 戦後』(1988)、『わが生活わが思想』(1988)、『松田道雄の続・安心育児』(1989)、『私は女性にしか期待しない』(1990)、『松田道雄 安心育児



の知恵64章』(1992)、『母と子への手紙—乳幼児から思春期までの健康相談』(1994)、『安楽に死にたい』(1997)、『幸福な医者』(1998 没後刊行)。

何はともあれ、松田道雄が収集した欧米のロシア史関係の蔵書の多くはこうして札幌大学図書館という老後の住処を見つけることができた。人になぞらえるなら、終の棲家を得て、生涯を全うすることとなったといえる。

松田の遺著となった『幸福な医者』にならうなら、「幸福な蔵書」といえるであろう。(本文中敬称略)

## 注

\* 付録の仮目録データの出力にあたっては前図書課係長下田誠氏、追加のロシア語図書データについては図書課係長森俊司氏の協力を得た。両氏の協力がなければ本稿は不十分なものにしかならなかったであろう。記して謝意を表す。

すでに1999年10月に札幌大学図書館に既存の図書とロシア語図書など288冊を除く1645冊の簡易目録が完成した。この紀要に付録として掲載したものは当初除かれた288冊からNACSIS WebcatとWorld catで書誌データの確認ができたロシア語図書117冊と142冊の欧文図書と和書7を加えた1911冊の目録である。目録上のタイトル数と冊数との相違は重複タイトルと多巻タイトルの一括記述によるものである。

- 1) 戦争中にロシア語の勉強が学生にとっては完全に不可能ではなかったであろうというのは水田洋のこのような文章にもみうけられる。「戦争中、ジャワにいたぼくへの手紙に、かれ(村上一郎)は『シベリア総督にでもなって、天下の水田洋なぞ飼殺しにせんものと』ロシア語の勉強をしている、とかいてよこした。検閲つきの軍事郵便だから、どこかでごまかさなければならなかったものかもしれない」とある。[水田、1984: 13] また水田が東亜研究所から軍属としてジャワにいた時期は1944年の1月からで、このときにジャカルタの古本屋で、日本ではすでに見ることのできなかつたマルクス関係の原書をあさる話がでてくる。
- 2) 内村と松田の関係については、著作集『松田道雄の本』第13巻の『いいたいこと・いいかったこと』に所収の「私の書いた本から」という章

の『社会主義リアリズム』前書き、再版の項に「第一版にあった誤りを訂正する機会を得たことを喜ぶ。誤りの箇所を御指摘下さった伊達四郎氏と、誤訳を教えていただいた内藤操氏に深い感謝を捧げる。(1959.7)」[松田、1980f: 224] という記述がある。内藤操とは内村剛介の本名である。また、最近出版された内村剛介の評論集『わが身を吹き抜けたロシア革命』(五月書房)の巻末の略年表に、「1958年11月松田道雄氏の推輓により、『知識人と権力—パステルナークの立場』(日本読書新聞)を発売」[内村、2000: 435] とある。内村剛介が11年にわたるシベリア抑留から最後の集団帰国者の一人として帰ったのが、1956年12月であった。

また松田は内村の『定本・生き急ぐ』の解説に「内村さんと最初におあいしたのは一九五七年でした。その年の六月に私は日本小児科学会の代表ということで、全ソ小児科学会に出席して、子どもの結核についての私の総決算をおぼつかないロシア語で報告したのです。……戦前から持ち続けていたマルクス主義を原則的には承認しながらも、それを日本の現実に忠実に適用しているととなえる日本の共産党の行動に若干の疑いをもちはじめていたことは、ハンガリー事件のおこるまえに立命館大学の日本史研究会の公開講座で講演した『戦争とインテリゲンチア』のなかにてでています。それから数年の私の仕事は日本共産党を指導したソ連共産党の素姓に集中することになります。あなたとおあいしたのは、そういうときでした。……内村さんとあうことがなかったら、私のソ連共産党についての調べは、もっとながくかかるか、あるいはまだおわらなかったかもしれません。ソ連共産党の素姓調べは、河出書房から出した『ロシアの革命』で終わりました。『ロシアの革命』をかきおえて日本の共産党がなんであったかという私の疑問もとけることになりました。その意味で内村さんは私に老後の余暇を早くもたらしてくださった恩人です。」[松田、1980b: 44-46] と書いている。

- 3) 松田がスラブ研究センターをその蔵書の寄贈先に考えたのはこんなところからうかがえる。「ナロードニキは、いまのソ連では禁書がおおくて、戦前の本を手にいれられないものには、実にこまる対象だった。ヴェンツェリだとか、ツーンだとかの解説書におおくよらなければならなかった。北大のスラブ研究施設(現・スラブ研究センター)の人たちが、こういう方面で、あまり人に知られないが、いい仕事をしていられるので、ずいぶんたすかった。」[松田、1971: 213]

- 4) 森はさっそく日通の業者と京都に出向き、発送の手配をしたのが1996年のことであった。松田の蔵書の受け取りについては森の札幌大学図書館報『ホルム』に書かれている。[森、1997] 松田が好んだピーカーのお酒と、ジャズ [松田、1980c : 42] については森の文章にも見うけられる。
- 5) 日本で戦後比較的早い時期にロシアの社会思想にふれた大塚金之助の『解放思想の人々』(岩波新書)のまえがきには、「学校をはなれたまじしい一読書生にとっては、図書館こそが命の綱である。しかし、私の勉強目標のためには、日本の首府東京の図書館の状況は、先進文明諸国のそれにくらべて、問題にならないほど、不備、偏狭、不親切、非人間的、かつ役人的であった。私は、一卒業生として、当然、東京商科大学の図書館—経済学にかけては日本第一級のもの—を使うことができたのであるが、同図書館は、一九三四年(昭和九年)から三年間、私の入館を許さなかった。三年後に入館を許されたときにも、私は、学生諸君に接しないことを約束しなければならなかった。したがって、私は、外来者閲覧室の設備がなくなってからは、事務室のタイピストの仕事機のそばで本を見せてもらったのである。上野の帝国図書館は、先進文明諸国の中央図書館とはまるでちがって、試験期には、学生諸君や受験生諸君の勉強場所に使われ、開館時間まえに行って行列をつくらなければ、満員になって入館もできず、おまけに、この図書館の洋書、ことに社会思想書は、非常にまずしかった。三田の慶応大学の図書館は、当時、日本におけるたった一つの公開大学図書館であって、役所風のくさみがなく、気もちがよかった。大原社会問題研究所は、その図書を公開してはいなかったが、いろいろの便宜をあたえてくれた。」と書いている。[大塚、1980a:93] さらに戦時下の社会科学の研究生活はきびしさをまじえていった。「一九四一(昭和一六)年、太平洋戦争がはじまり、外国からの本や雑誌はぴたりととまり、図書館は洋書を買わずに邦書ばかり買い、英米思想は適性思想として排撃され、要監視人のぼくには特高増員の上に憲兵が加わる。手も足も出なくなったように見えた。ぼくは、一方では、禁制(自由主義をふくむ)の邦書一千冊と洋書五百冊をひそかに自分の手で焼きすて、他方では、東京—神戸間の古本屋を歩き、東京では、B29の爆撃のなかでも、鉄かぶとゲートル姿で(そうしないと警官にとがめられた)、洋書や明治文献を二束三文で集めた」と大塚は自伝の中で書いている。[大塚、1980b : 513-514] しかし、戦後になって一般に研究が市井の者にとって便利になったという保証はない。

- 6) 『史学雑誌』の1970年度「回顧と展望 ヨーロッパ近代—東欧」の部で外川継男は「最後に松田道雄氏の二つの著作『ロシアの革命』(河出書房)と『革命と知識人』(筑摩書房)および林道義氏の「ロシア革命とミール共同体—スターリニズムの歴史的根源」(『思想』559)をあげなければなるまい。いずれも「現代」の分担領域であるが、これら多くの問題提起をもつ著作が歴史の専門家以外の人びとによって書かれたことは、やはり特記さるべきであろう。松田氏はこまかい史実の上で、林氏は史料的裏付の面でそれぞれいくらかも問題を残しているが、これらの問題提起を受けて立つこそ歴史家の仕事であるといわなければならない」[外川、1971:340]と書いているが、この松田の書物が取り上げられるはずの「東欧—現代」の項にはこれらの文献はみあたらない。『書評年報』、『雑誌記事索引』、『大宅壮一文庫雑誌記事索引』で検索した『ロシアの革命』についての書評は、確認できたものはすべて文献リストに掲げた。『書評年報』によると『週刊朝日』の「核」という署名は伊東光晴のものとされている。ロシア史研究者の岩間徹は、松田のロシアの革命を書きながら現代日本の学生反乱を書いていると思わせることがこの書の歴史書としての魅力をましていると書いている。[岩間、1970:81-82]松田自身は『ロシアの革命』の「文庫版のあとがき」に「日本のマルクス主義がロシア製であることと、十月革命が歴史的必然でないことを、いいたかったからだった。初版の『あとがき』に、この本の執筆を不運だと思っているとかいたのは、一九二〇年代末の精神の台風を経験した仲間の誰もが、日本マルクス主義の反省として、十月革命にいたるロシアの思想をかいてくれなかったことへのうらみをいったものである。こうしたいきさつでできたのであるから、『ロシアの革命』は教科書用の通史ではない。……もともと私はアカデミーとは無縁であり、アカデミーの人がめずらしく私のかいたものを引用するときは『アカデミーの枠外では』という但し書きがつけられる。アカデミズムとは無縁でも、この本はペレストロイカに関心をもつ市民には役に立つところがあるだろう」[松田、1990:391]といている。

## 文献リスト

- 青木佐保、1998、「父と書物」、『窓』(107)  
 荒畑寒村、1960、『ロシア革命の曙』(岩波新書)、岩波書店  
 ———、1967、『ロシア革命前史』(筑摩叢書)、筑摩書房  
 伊東光晴、1970、「歴史の流れのなかにとらえる 松田道雄『ロシア革命』、

- 『週刊朝日』、75 (19)
- 岩間徹、1970、「希望から幻滅への軌跡 松田道雄『ロシアの革命』、『朝日ジャーナル』12 (17)
- 内村剛介、1970a、「歴史と対決し読者と対話して 松田道雄著『ロシア革命』にふれて」、『日本読書新聞』(1546)
- 、1970b、「著者への手紙『革命と市民的自由』松田道雄著」、『現代の眼』11 (7)
- 、2000、『わが身を吹き抜けたロシア革命』、五月書房
- 遠藤卓郎、1999、「図書館と雰囲気—気の立場から」、『図書館を使う』(図書館・情報メディア双書 12)、勉誠出版
- 大滝則忠、1971、「戦前期出版警察法制下の図書館—その閲覧禁止本についての歴史的素描」、『参考書誌研究』(2)
- 大塚金之助、1980a、「解放思想史の人々」、『大塚金之助著作集 第4巻』、(初出、1949、岩波新書)
- 、1980b、「自伝」、『大塚金之助著作集 第4巻』、(初出、1969、「わが道 経済学」、『朝日新聞』)
- 、1981a、「図書館から」、『大塚金之助著作集 第5巻』、岩波書店、(初出、1935、『神戸商大新聞』)
- 、1981b、「大学図書館」、『大塚金之助著作集 第5巻』、岩波書店、(初出、1936、『帝国大学新聞』)
- 荻野富士夫、2000、『思想検事』(岩波新書)、岩波書店
- 樺山紘一、1986、「松田道雄」、『言論は日本を動かす』(社会を教育する 6)、講談社
- 河野健二編、1965、『マルクス主義と社会主義者』(思想の歴史 9)、平凡社
- 桑原武夫編、1964、『ブルジョワ革命の比較研究』、筑摩書房
- 小林晃、1998、「追憶松田道雄先生“小林くんがきはったえ”」、『窓』(107)
- 桜井哲夫、1994、『可能性としての「戦後」』(講談社選書メチエ 7)、講談社
- 佐藤昇、1982、「随想ロシア革命—松田道雄氏の所論にふれて」、『現代の理論』19 (2)
- 清水正三編、1977、『戦争と図書館』、白石書店
- 鈴木正、1970、「松田道雄著『革命と市民的自由』、『図書新聞』、(1074)
- 陶山幾朗、1994、『シベリアの思想家—内村剛介とソルジェニーツィン』風琳堂
- 田中陽児、1970、「革命は未完の自覚 松田道雄著『ロシア革命』の強烈な想念」、『図書新聞』、(1059)
- 津野海太郎、1997、「だれのための電子図書館」『季刊本とコンピュータ』(2)

- 、1998a、『新・本とつきあう法—活字本から電子本まで』（中公新書）、中央公論社
- 、1998b、「市民の図書館という理想のゆくえ」、『図書館雑誌』92（5）：336—338
- 外川継男、1971、「1970年の歴史学界—回顧と展望—ヨーロッパ近代・東欧」、『史学雑誌』80（5）
- 鳥山成人、1970、「松田道雄著『革命と市民的自由』」、『北海道新聞』1970.6.8
- トロツキー、L.、1972、『レーニン』、松田道雄、竹内成明訳、河出書房新社
- 中林隆明、1995、「上野図書館における洋書の形成について」、石井敦先生古希記念論集刊行会編、『転換期における図書館の課題と歴史—石井敦先生古希記念論集』、緑蔭書房
- 野田茂徳、1970、「永久の暗闇の情念—松田道雄氏・和田春樹氏の著書にふれて」、『図書新聞』、(1070)
- 林道義、1970、「松田道雄氏の『ロシアの革命』を読んで」、『読書人』(819)
- 富士正晴、1970、「松田道雄著『ロシアの革命』」、『展望』、(137)
- 細谷新治、1980、「全国経済学書コレクション—日本にある経済学関係洋書の特殊文庫」、『経済セミナー』(300)（細谷 [1987] に再録）
- 、1987、『私の体験的書誌学』、私家本
- 松田道雄、1958、『社会主義リアリズム』（文芸思想史 4）、三一書房
- 、1962、『京の町かどから』、朝日新聞社
- 、1965、『日本知識人の思想』（筑摩叢書）、筑摩書房
- 、1970a、『ロシアの革命』（世界の歴史 22）、河出書房新社
- 、1970b、『革命と市民的自由』筑摩書房
- 、1971、『私の読んだ本』（岩波新書）、岩波書店
- 、1975、『花洛—京都追憶』（岩波新書）、岩波書店
- 、1977、『在野の思想家たち—日本近代思想の一考察』、岩波書店
- 、1979、『ハーフ・タイム 上』（松田道雄の本 10）、筑摩書房
- 、1980a、『生きること・死ぬこと』（松田道雄の本 7）、筑摩書房
- 、1980b、『革命のなかの人間』（松田道雄の本 8）、筑摩書房
- 、1980c、『革命家の肖像』（松田道雄の本 9）、筑摩書房
- 、1980d、『ハーフ・タイム 下』（松田道雄の本 11）、筑摩書房
- 、1980e、『私の手帖から』（松田道雄の本 12）、筑摩書房
- 、1980f、『いいたいこといいたかったこと』（松田道雄の本 13）、筑摩書房
- 、1980g、『私の読書法』（松田道雄の本 15）、筑摩書房
- 、1980h、『若き人々へ』（松田道雄の本 16）、筑摩書房

- 、1983a、『本の虫—「ハーフ・タイム」53・1—55・12』、筑摩書房
- 、1983b、『日常を愛する—「ハーフ・タイム」56・1—58・9』、筑摩書房
- 、1988a、『町医者 of 戦後』(岩波ブックレット)、岩波書店
- 、1988b、『わが生活 わが思想』、岩波書店
- 、1990、『ロシアの革命』(世界の歴史 22) 河出文庫版、河出書房新社
- 、1998、『幸運な医者』、岩波書店
- 松本剛、1993、『略奪した文化—戦争と図書館』、岩波書店
- Mizuta, Hiroshi, 1967, *Adam Smith's library : a supplement to Bonar's Catalogue with a checklist of the whole library*, Cambridge University Press
- 水田洋、1978、『ある精神の軌跡』、東洋経済新報社
- 、1984、『人のこと、本のこと』、ミネルヴァ書房
- 、1994、『評論集クリティカルに』、御茶の水書房
- 森俊司、1997、「花洛夷川通に松田先生を訪ねて」、『札幌大学図書館報ホルム』(8)
- 山階朋子、1981、「松田道雄の『家』像をめぐる」、『思想の科学』第7次(4)
- 和田春樹、1971、「松田道雄著『ロシアの革命』」、『世界』(296)
- 「“人間” 中心の革命史、松田道雄『ロシアの革命』」、『朝日新聞』1970.4.7
- 護葉事務所「京都府立図書館をめぐる問題」、  
[http://www.ijnet.or.jp/goyou/library/pref\\_library/index.html](http://www.ijnet.or.jp/goyou/library/pref_library/index.html) (2000.10)